

S-3 山田町の東日本大震災記録誌

—その編集テーマと制作過程—

佐藤孝雄（山田町役場）

【はじめに】山田町は東日本大震災で人口の4%強に当たる825人が犠牲になり、家屋全体の4割に近い約2760棟が全壊した。被災の特徴として、全国の被災地で最大の延焼面積となる「津波火災」で中心街が焼失したことや、外洋から押し寄せた巨大津波が既存集落を大きく破壊したことなどが挙げられる。

【町の震災伝承事業】国の復興交付金を財源に、2015年3月に体験手記集『3・11 百九人の手記 岩手県山田町東日本大震災の記録』、本年5月に同事業の柱となる震災記録誌『3・11 残し、語り、伝える 岩手県山田町東日本大震災の記録』を刊行した。

【震災記録誌の編集方針】町の復興計画の全体を貫くテーマは「二度と津波による犠牲者を出さない」である。記録誌もこれに沿って、客観的なデータの集約だけにとどまらず、被災状況の分析・検証を経て、津波から命を守るための「教訓」を引き出すことを主眼とした。具体的には、①ジャーナリスティックな視点による事実の発掘と②学術的な知見に基づく検証作業—とが車の両輪のように機能する方法を模索した。記録誌では、被災の概要のほか、主に町内6地区であの日何があったのかを町民の証言から探るドキュメンタリー・パート（ルポルタージュ）と、学術的な検証・分析を行うパートを分けて章立てした。

【地理学的方法論の採用】課題は筆者の専門外の学術パートを誰が担当するかであった。思案していた折、2014年9月に東北地理学会の主催で山田町の被災状況に関するシンポジウムが町中央公民館で開かれた。これを聴講した筆者は、被災の実相を探るには地理学的なアプローチが非常に有効だとほぼ確信した。そこで、震災直後から継続的に山田町や宮古市を調査し、同シンポを運営した鹿児島大の岩船昌起教授に協力を要請した。役場の内部的な手続きなどで葛藤や曲折はあったものの、岩船教授を中心に地理学者ら6人で構成する研究グループが発足、2015年8月から16年2月にかけて被災地域の調査を行い、その結果に基づいて学術パートの記事を執筆していただいた。各地区で特徴的な地形・地質や土地改変の経緯、そこでの避難行動▽避難者の人口動態▽被災者の食生活や栄養バランス—などが明らかになった。さらに山田地区の津波火災の消防活動や、指定避難所で複数の犠牲者を出した小谷鳥集落の現実などを追った筆者のルポルタージュと合わせて、「山田町の東日本大震災」の全体像を重層的に捉えることができた。

【おわりに】行政機関の刊行物はえてして数値データや事実関係の羅列に終始しがちである。しかし、山田町の震災記録誌はそれらの背後にある個々人の生きざまや足跡、「物語性」に注目し、真に「血の通った」書誌を目指した。そして、一人でも多くの読者に手に取ってもらえるよう、読みやすさ、分かりやすさを追求し、誌面構成やデザインにも気を配った。町民が常に座右に置き、津波からどう逃げ切るべきかの指針になれば幸いである。